日本学士院賞受賞

日本学士院賞授賞制度は、明治43年に創設され、学術上特にすぐれた論文、著書その他の研究業績に対して授賞を行っています。授賞式は明治44年より毎年挙行され、平成20年度で第98回を迎えました。昭和24年以降の授賞式には天皇陛下の行幸を、平成2年からは天皇皇后両陛下の行幸啓を仰いで挙行されています。過去の受賞者には、木村栄、高峰譲吉、野口英世をはじめ、後にノーベル賞を受賞した湯川秀樹、朝永振一郎、福井謙一、江崎玲於奈、小柴昌俊、野依良治がいます。

〔日本学士院ホームページより引用〕 http://www.japan-acad.go.jp/

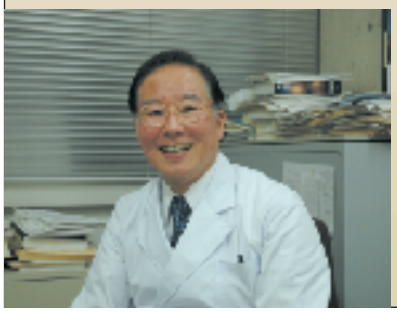
早稲田大学理工学術院　教授　**竜田 邦明**
（小学校64期生、中学校・高等学校7期生）

『人に生かされ、人と生きるということ』

今春、最高の学術賞である日本学士院賞を受賞した。この上ない名誉であるが、すべては実にユニークな先生に恵まれた追手門学院から始まった。小学校の時、クモやハチで有名だった2人の先生が顕微鏡を見ながら、当時は珍しかった黒インクで観察図を描いておられた姿にあこがれた。また、中学校の英語の先生のスピーチや化学の先生の実験、そして高校の数学、古文や漢文の先生の独自の教材を使った授業にも知らず知らずに引き込まれ、それらの科目が好きになったことを今でも印象深く思い出す。先生方のお陰で、12年間皆勤で過ごすことができ、いろいろな人との接し方を体得したことは、その後の生き方に大きな影響を与えた。結局は個人の魅力がすべてを制するということで、「個」の大切さは学校に限らず一般に通じることである。

1953年、その前年に父を亡くした中学1年生の悲しみを吹き飛ばし、人生を左右するビッグニュースが相次いで報道された。4月、ボストンマラソンで山田敬蔵氏が優勝し、5月にはエベレスト初登頂が報じられ、挑戦する勇気と冒険心をかき立てられた。さらに6月、ワトソンとクリック両博士によるDNAの二重らせん構造の解明が報道された。世の中は遺伝子、DNA、分子生物学だと盛り上がってきて、現在の環境問題やITのように中学校や高校でもよく耳にするようになり当然のことながら私も影響を受け、分子生物学に興味を抱くようになっていった。

高校3年のとき、化学の先生から慶應義塾大学の医学部には分子生物学で有名な教授がいると教えられ、迷うことなく慶應の医学部に入学してしまった。しかし、残念なことに、その時代の日本では遺伝子の研究は無理であることをその教授から知らされた。と同時に、将来、化学で生命現象を語れる日が必ず来るので「化学」の勉強をしておいた方が良いと言われ、有機合成化学の権威である工学部の梅澤純夫教授を紹介してくださった。面会して話しているうちに化学の魅力と重要性に心を奪われ、完全にその気になってしまい、2ヶ月後、工学部に転部することになった。その後、抗生物質カナマイシンの構造を決定し全合成も完成して工学博士号を取得することも、後にその梅澤先生の研究室を受け継ぐことも知る由もなかった。幸運にも教授の実弟である梅澤濱夫先生（微生物化学研究所長、文化勲章受章者）にも指導を受け、多くの優れた研究者や経営者との懇談や研究討論の場に同席させていただいたことが、その後の人脈作りに大きな財産となった。



1973年、ハーバード大学のR.B.ウッドワード先生（1965年にノーベル化学賞、有機合成化学の神といわれた）に招かれ客員研究員として研究を行うことになった。ウッドワード先生の研究哲学を学び、国内外の俊才たちと出会い語り合ったことが、私の研究者としての基軸を形成し歩むべき道を決定付けた。その当時の研究と伝説のおかげで、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、パリ第6大学などの客員教授をさせていただき、友人の多くがその後各国のリーダーになったので世界の主要な大学や企業の多くの科学者とネットワークを作ることができた。これも最高の財産である。

ただ、あの時そのまま分子生物学を追究していたら、ワトソン先生の門を叩いていたかもしれず、歩む道も大きく変わっていただろうと思うが、そのワトソン先生にハーバードのキャンパスで遭遇し何度も話をする機会に恵まれた。教授の言葉の中で特に印象深いものは、生命科学者であるにもかかわらず「私は化学が完璧だった」というものであった。この時、興味を専門だけにしぼらず「百芸をみながら一芸に秀でる」ことの大切さを痛感した。

慶應義塾大学理工学部の教授に就任後約5年で、早稲田大学理工学部に移籍し現在に至っているが、これまで教育と研究が順調に進展してきたのは、巡り会った人々の支援によることは言うまでもない。幸いなことに、これまで“自分のためにならない人と出会ったことがない”。運良く良い時代に生まれ、良い人と巡り会えたことに感謝せざるを得ない。

「化学」という天然・自然と毎日対峙していると、真摯に向き合い語りかけることの大切さと「愚直」に生きることの重要性を思い知らされ、一般社会においても人と対した時、同じ心構えで接することが最も大切であると肝に銘じている。

特に、若い人は多くの人と語り、考え方や生き方を学んで自分の中に多くの選択肢を作ることが大切で、そのためには、各人がまず家族と語り家事を手伝って、ものの大切さと人の温かさを知ることが大事である。しかし、現在ではこれが軽視されつつあり、親が子供に価値観を教える機会も減っている。こういう時代にこそ校友会山桜会の存在意義がある。誰もが卒業したくても卒業できない学校を巣立った誇りと絆を大切にして同窓生達のネットワークを確固たるものにし、多くの若人に生き様を見せることが我々の使命であろう。